

〔論文〕

## 1910年代イギリスのモンテッソーリ教育法 導入過程に関する一研究

中 田 尚 美\*

本稿は、イギリスにおけるモンテッソーリ教育運動研究の一環として、1910年代のモンテッソーリ教育法の導入過程の特質について検討する試みである。知的障害児治療教育に従事していたモンテッソーリ（Maria Montessori, 1870-1952）は、1907年のローマの「子どもの家」（Casa dei Bambini）で健常児を対象に就学前教育の新しい実験に取り組み、世界的な注目を呼んだ。1910年以降、モンテッソーリ教育はイタリア国内だけでなく、世界的に実践されるようになり、特にイギリスに大きな影響を与えた。1910年代のイギリスにはモンテッソーリ教育法を必要とする社会的背景が存在し、そのためにモンテッソーリ教育法は肯定的な評価を受けた。当時のイギリスの状況とモンテッソーリ教育法に内在する諸要素がいわば共鳴してモンテッソーリ教育法の大流行という社会現象が発生したと考えられる。また、モンテッソーリ支持者の主流を占めていたのは、海外の教育方法を盲目的に受容するのではなく、自国の教育風土に合うようにそれを修正し変革していこうとする姿勢であった。

キーワード：モンテッソーリ教育法、イギリス、1910年代、海外の教育方法の受容

### はじめに

明治以降、様々な諸外国の教育内容や方法が我が国に紹介され、実践され、その過程において変容を遂げてきた。本稿で取り上げるモンテッソーリ教育法もその一つである。大正時代に紹介されたモンテッソーリ教育法は、1960年代以降、私立のキリスト教主義幼稚園や保育所を中心に多くの保育施設に取り入れられ、現在に至っている。甲斐仁子は、現在の我が国の保育界におけるモンテッソーリの影響は、多様な子ども中心のプログラム、子どもの自発的な活動の重視、異年齢保育、子どもサイズの用具及び子ども中心の環境構成に見ることができるとしている<sup>1)</sup>。

20世紀初頭にイタリアで誕生したモンテッソーリ教育法は、我が国だけでなく各国の幼児教育界に大きな影響を与えた。しかし彼女の教育法には批判も多く、アメリカでは熱狂的な歓迎を受けたのと同じくらいの早さでモンテッソーリ教育法が姿を消すことになる。

一方、イギリスでは、モンテッソーリ教育法の受容と導入を激情的・一時的なものに終わらせない基盤形成が実現されていった。イギリスにおけるモンテッソーリ教育法は、1910年代の熱狂的なブームが過ぎ去った後も、イタリアとは異質の教育風土に合うように修正され変容を遂げながら、1930年代にかけてイギリス幼児教育界に大きな影響を及

---

\*大阪総合保育大学 大学院生

ばしていく。1910年代のモンテッソーリブームは、後にモンテッソーリ教育が受容されること、あるいはモンテッソーリ教育が批判されることを刺激し、イギリスの幼児教育界にモンテッソーリ教育の原理と教具の一部が定着していくうえで重要な役割を果たしたのである。海外の教育方法を盲目的に受容するのではなく、自国の教育風土に合うように修正し変革していった事例として、イギリスにおけるモンテッソーリ教育法をとりあげ、その実態を明らかにすることは意義あることだと考える。そこで本稿では、海外の新しい教育方法受容の一つの類型として1910年代のイギリスを選び、モンテッソーリ教育がどのように受け入れられていったのかを考察してみたい。

イギリスにおけるモンテッソーリ教育運動の先行研究としては、コーエン（Cohen）による「イングランドにおけるモンテッソーリ運動、1911-1952」（The Montessori Movement in England, 1911-1952）がある。コーエンは、教育改革運動の失敗例としてイングランドにおけるモンテッソーリ運動を取り上げ、その原因を分析している<sup>2)</sup>。クレマー（Rita Climer）は、その著作の中でイギリスにおけるモンテッソーリ運動に言及している<sup>3)</sup>。

我が国では、林信二郎がイギリスにおけるモンテッソーリ運動を、1) 導入期（1908-1914）、2) 批判的検討期（1914-1919）、3) 発展期（1919-1921）、4) 分裂・衰退期（1921-1939）、5) 中断期（1939-1946）、6) 再導入期（1946 - 現在まで）に分け、第二次世界大戦までを中心にモンテッソーリ運動の展開を論じている<sup>4)</sup>。林は、ロンドン・タイムズの教育版（Times Educational Supplement 以下、T.E.S. と略記）<sup>5)</sup>の、特に1910年代<sup>6)</sup>及び1920-30年代<sup>7)</sup>を取り上げ、それぞれの時期のモンテッソーリ運動の展開を明らかにしているが、モンテッソーリ運動と当時のイギリスの社会背景との関連について論じてはいない。なお三笠乙彦は、その著作『自己表現の教育学』の中で20世紀初頭の新教育運動とモンテッソーリ運動の関係に言及している<sup>8)</sup>し、さらに山崎洋子も、その著『ニール「新教育」思想の研究』において新教育運動に影響を与えた実践としてモンテッソーリの実践を取り上げている<sup>9)</sup>。

そこで本稿では、これらの先行研究を踏まえ、まず、モンテッソーリ教育法受容の背景として、モンテッソーリ教育法が受容されたイギリスの状況、イタリアの最初の「子どもの家」の実践に言及する。次に、1910年代のイギリスにおけるモンテッソーリ教育法導入の経緯を辿り、モンテッソーリ教育法に対する批判について明らかにする。さらに本稿では、モンテッソーリ教育法を必要とする社会的背景が1910年代のイギリスに存在し、そのためにモンテッソーリ教育法が肯定的な評価を受けたという見地に立ち、当時のイギリスの状況とモンテッソーリ教育法に内在する諸要素がいわば共鳴してモンテッソーリ教育法の大流行という社会現象が発生したことを明らかにしたい。最後に、ブームが過ぎ去った後も、イギリスの幼児教育界にモンテッソーリ教育法が定着していくことに貢献したモンテッソーリ支持者の姿勢についても検討し、1910年代のイギリスにおけるモンテッソーリ教育法導入の特徴について明らかにしようと試みる。

## 1 モンテッソーリ教育法受容の背景

### 1.1 19世紀末から20世紀初頭のイギリスの教育

19世紀末のイギリスは「世界の工場」の地位をすでに失っていたとはいえ、まだ世界

最大の植民地帝国であった。この大英帝国を支え強めようとする帝国主義的政策は19世紀後半最高潮に達している。このような社会的動向の下で、中等教育、初等教育を通して教育の革新の機運は高まる。

イギリス新教育運動の端緒は、1889年に創設された中等段階の「新学校」(New School) アボッツホルム校 (Abbotsholme School) におけるセシル・レデイ (Cecil Reddie, 1858-1932) や1893年に設立されたビデールズ校 (Bedales School, -?) におけるバドレー (John H. Badley, 1865-1967) らの教育実践にある。当時の伝統的なパブリック・スクール (public school) が古典的な教養の伝統に制約されて社会の課題に対応していない状況を憂慮した彼らは、現実と対応できるような新しい教育内容や方法を求める運動を唱導した。

こうした動向を背景に、幼児や子どもを対象とした初等段階の教育改革運動が生起していく。それは、1862年の「改正教育令 (Revised Code)」によって施行された出来高払い制度 (Payment by Results System)<sup>10)</sup> の悪弊が残っていた初歩学校 (elementary school) の悲惨な実態に心を痛め、そのような貧しい学校の子どもたちを救済しようとした教育行政官や視学官が中心になって進められた。助成金獲得を目指した訓練主義と体罰主義が問題視され、保育、幼児教育、基礎教育の改革の必要性が強調されていった<sup>11)</sup>。

ここで、19世紀後半から20世紀初頭のイギリスの「幼児学校 (infant school)」の状況に簡単に触れておく<sup>12)</sup>。1870年から1900年の間に5歳以下の子どもの45%が幼児学校に通っていたとされている。しかし、ウィルダースピン (Samuel Wilderspin, 1792-1866) が普及に努めた幼児学校の実践は、旧来からの伝統的な書物学校の方式によるものであった。グラマースクール (grammar school) の奨学金試験制度、またパブリック・スクールの入学試験制度が、主として中産階級を対象とする幼児教育施設に重くのしかかり、イギリスの幼児教育界には準備教授の伝統が根強く残っていた。

20世紀初頭の幼児学校は、50-60名かそれ以上の幼児が座らされる固定式の階段教室を残していた。この階段教室で、教師は3R'sのフォーマルな教授を与え、子どもたちはそれらの暗記学習を強制された。1870年、イギリス最初の初等教育令 (Elementary Education Act) が施行され、5歳から就学が義務づけられたこととあいまって、出来高払い制度による知的教授はますます拍車をかけられていった。

フレーベル協会 (Froebel Society for the Promotion of the Kindergarten System) は1875年までに体制を整え、1887年に全国フレーベル連合 (National Froebel Union) が結成され、幼児学校にフレーベルの恩物遊びや作業が取り入れられるようになってきてはいた。しかし、それらは前述した階段教室で教師の命令の下に行われる形式主義に堕していた。教育内容の大半を3R's教授が占め、幼稚園方式が単に息抜きとしかみなされない幼児学校の傾向は、20世紀にまで持ち越されることになる。

しかし、1895年に出来高払い制度は廃止され、伝統的な幼児学校の残滓が多くの人々の批判の対象となった。1905年に公にされた女性視学たちの報告書はフレーベルの原理の立場から、3R'sのフォーマルな教授に抗議し、階段教室を厳しく批判している<sup>13)</sup>。1906年にはデューイ (John Dewey, 1859-1952) の論文集『児童とカリキュラム』 (*The Child and the Curriculum*) が出版され、イギリスの教育者たちの関心が最新のアメリカ教育学に向けられるようになった。アメリカ進歩主義教育の影響を受けて、イギリスでは、



より児童中心主義的な幼児学校観が一般的になりつつあった。教育行政官や視学官、初歩学校や保育学校の教師、保健・福祉関係者、宗教者など多様な領域の人々が、新しい教育理念に裏打ちされた新しい方法論を求めて新教育運動に結集していた。以上述べたように、20世紀初頭のギリスの教育界は混沌とした状況にあった。

## 1.2 イタリアにおける最初の「子どもの家」の実践

前項で述べたような状況下のイギリスに紹介されたのが、イタリアの教育者モンテッソーリの教育実践だった。新しい教育を模索していたイギリスの教育界に大きな衝撃を与えたモンテッソーリの教育実践は、いったいどのようなものだったのだろうか。以下、イタリアにおける最初の「子どもの家」の実践に言及しよう。

1907年イタリアでは、知的障害児治療教育に従事していたモンテッソーリが「子どもの家」で健常児を対象に就学前教育の新しい実験に取り組んでいた。「子どもの家」はスラム街のサン・ロレンツォ地区に、ローマ住宅改良協会の住宅改良の一環として設立された施設であり、社会の最底辺に生きる幼児たちを対象としていた。医師であるモンテッソーリは、知的障害児治療教育で成果を上げた方法を健常児に適用すべく、「子どもの家」で障害児研究から帰納的に導かれた医学的・生理学的理論に基づく教育実践を行ったのである。

「子どもの家」では、紙の折りたたみと粘土細工などフレーベルの作業の一部は利用されたが、その他の作業は退けられた。恩物と集団レッスンは行われず、その代わりに、感覚訓練、日常生活の練習、運動あるいは筋肉教育、そしてキンダーガルテンにおける実践からの完全な訣別として3R'sの訓練が行われた。モンテッソーリは最初「子どもの家」で読み書きを教えるべきでないという立場を取っていたが、母親たちからの強い要望で、以前障害児に行った書き方の教育を「子どもの家」で試みた。その結果、彼女自身が驚くほどの優れた成果を収めることができたのである<sup>14)</sup>。

「子どもの家」における教育方法は主に教具に依存していた。それは最初セガン(Edouard Onesimus Seguin, 1812-1880)やイタール(Jean Mare Gaspard Itard, 1774-1838)によって考案され、後にモンテッソーリによって作成されたものであり、色彩豊かで変化に富み、系統立てられたものである。教具はモンテッソーリの教育環境において中心的な位置を占めている。それは先例のないほど個人教授(individualized instruction)を可能にした<sup>15)</sup>。伝統的な時間割とクラス集団は廃止され、賞罰も廃止された。子どもたちは自由に作業したり休憩したりすること、自分が作業したいものを選び、自分のペースで作業することができた。モンテッソーリは解説者、教導者としての教師の役割を最小限のものとした。しかし、放縦が許されたわけではない。乱暴、粗野な行動など、他者を傷つけたり悩ませたりする行為は禁じられていた。同様にモンテッソーリは、教具を彼女が意図している方法以外で自由に使用することを断固として認めなかった。

モンテッソーリ教育の基本原理は、自己教育(auto education)の原理である。モンテッソーリによると、子どもは発達への要求を持ち、子どもには「知識への本能的な愛(an instinctive love of knowledge)」、「学習のための学習に対する愛(the love of learning for learning's sake)<sup>16)</sup>」があるという。したがって、教師による直接的な教育ではなく、教具による子どもの自己教育が教育方法の原則となる。教師は適切な環境を構成し、子どもを

指導してこの子どもの自己教育の力を発揮させなければならない。これが成就すれば、すなわち子どもが作業に集中し、本来の子どもの姿を取り戻したならば、教師は基本的には子どもの活動を乱すことのない静かな観察者の位置に立つことになる。このような子どもの自由と作業を可能にするものとして、モンテッソーリの教具は生まれた。子どもの「自由」と「個性」を尊重し、「作業」による教育を基本とするモンテッソーリ教育は、まさに、20世紀初頭に展開された世界の新教育運動の一翼を担うにふさわしい教育思想であったということができよう。

## 2 イギリスにおけるモンテッソーリ教育法導入の過程

### 2.1. モンテッソーリブームの到来

1909年、モンテッソーリは教育実践の成果を『子どもの家における幼児教育に適用された科学的教育学の方法』(*Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all'Educazione Infantile nelle Case dei Bambini*)に書き著す。1912年、この書は『モンテッソーリ・メソッド』(*The Montessori Method*)として英訳され、世界の教育界、特に幼児教育界に衝撃を与えた。イギリスでも、この書は、教育関係者に広く読まれ、多くの批評が新聞、雑誌に掲載され、教育関係者のみならず一般の人々の関心をも引くようになった。

同年、エドモンド G・A・ホームズ (Edmond C. Holmes, 1850-1936) による公式報告書『モンテッソーリの教育システム』(*The Montessori System of Education*)<sup>17)</sup> が出版され、新聞雑誌上で論議を呼んだ。同年、ロンドンに連合王国モンテッソーリ協会 (*The Montessori Society of the United Kingdom* 以下、モンテッソーリ協会と略記) が設立され、その後イギリス各地の大都市にモンテッソーリ協会が設立された。モンテッソーリ・スクール及びモンテッソーリ・クラスが各地に次々と設置され、当時の有名な教育者たちは一様にモンテッソーリ教育法を賞賛した。

1912年末のタイムズ教育版によれば、「モンテッソーリ・システムへの関心は日増しに高くなっている。今では、ローマ詣で (pilgrimage to Roma) は、教育者たちの教育に不可欠のものとさえなっている。イギリスの紳士たちは、通訳なしでモンテッソーリと話すためにイタリア語を学んでおり、イギリスの婦人たちは本場でそのシステムを学ぶためにローマに送られつつある<sup>18)</sup>」というような状況であった。

このようなモンテッソーリブームの分析に入る前に、ブームの火つけ役であるホームズの簡単なプロフィールについて確認しておきたい。

彼は1873年にオックスフォードを卒業した後、勅任視学官 (His Majesty's Inspector of Schools) を長く務め、有能な教育行政官として名を高めた。詩人、著述家であり、宗派を超えてユートピア的共同体を探求する組織アルファ・ユニオン (Alpha Union) のメンバーでもあった。勅任視学官を退官した直後の1911年にホームズは、『教育の現状と可能性—一般の教育と特殊な初歩教育の研究』(*What is and What might be—A Study of Education in General and Elementary in Particular*)<sup>19)</sup> を著している。彼はその著作において、現在の教育は機械的な服従への道にしかすぎず、機械的な服従から自己実現へと教育に新たな転換がもたらされなくてはならないと主張した。彼によれば、自己実現と魂の潜在能力の発達こそが人生の目的であり、教育の機能は、この内的成長を助成することにある。イギリス

全土を覆う旧教育的風土を批判した彼の『教育の現状と可能性』は、新教育運動家たちの間にセンセーションを巻き起こした<sup>20)</sup>。以後のホームズは児童中心主義の新教育運動家として活躍し、その後のイギリス新教育運動に大きな影響を与えることになる。

さて、ホームズが勅任視学官を退官したのは1910年の12月であるが、教育院（Board of Education）は、その頃イギリスの教育関係者の間で話題になり始めていたモンテッソーリ教育の視察をホームズに依頼した。ローマに赴いた彼は「子どもの家」を訪問し、帰国後、前述した報告書を提出した。その中で彼は、モンテッソーリの自己教育の原理を高く評価し、現在の教育上の問題を解決する鍵がそこにあると述べ、「私の考えでは、この教育システムはすべての年齢の子どもに適用できるものである<sup>21)</sup>」としている。

ホームズによれば、モンテッソーリ教育の主要な理念は自由な雰囲気における自己発達（self-development）であり、自由にもかかわらず、いやそれゆえに子どもたちは行儀がよく、晴れやかで幸せそうである。さらに、モンテッソーリは非常に幼い子どもにも読み書きを教えることができる。彼らの頭脳に過度な負担をかけず、子どもたちは興味深いゲームを楽しんでいるかのように読み書きを学ぶことができると、3R's教授におけるモンテッソーリの成功を称賛している。ただし、いくつかの留保があった。ホームズは、教具がイングランドでより安く製造できることを希望している。さらに、自由描画がなく、粘土細工、おとぎ話、自由遊びもほとんどないモンテッソーリのカリキュラムがイギリス人の好みに合うには狭すぎることを指摘し、慎重な受容を勧めている<sup>22)</sup>。

ホームズは、モンテッソーリ教育方法についていくつかの疑問を持ちながらも、「自己活動の原理」と彼女の教具には、当時のイギリスの教育の諸問題を解決させる要素があると考え、モンテッソーリ教育の推進者になっていく。彼の積極的な活動によって、モンテッソーリ教育方法とイギリス新教育は密接な関わりを持つことになる。以下にその経緯について述べよう。

## 2.2. モンテッソーリブームの展開

### (1) モンテッソーリ協会の設立（1912年）

1912年4月、ホームズと彼の友人で富豪のホーカー（Betraum Hawker）が中心になり、ロンドンでモンテッソーリ協会が設立された。協会の目的は、モンテッソーリと接触を保ち、イギリスの学校に配属するモンテッソーリ教師を養成する手配をし、モンテッソーリ教育法を教育専門家や一般人に伝えることであった。つまり、協会の目的はモンテッソーリとの連携を保ちつつ、やがて自国で教員養成ができるようになる準備をすること、啓蒙普及活動を行うことであった。このうちの第二の教員養成に関しては、当面、委員会が推薦する学生をモンテッソーリの許に送り込んで教員養成コースを受けさせ、その見返りとして一定の額をモンテッソーリに払う。そして、モンテッソーリの許で資格を取った教員がイギリスで教員養成に取り組んでほしいということであった<sup>23)</sup>。

この協会には200人もの会員が集まった。協会の運営に当たるメンバーには、優れた教育活動家として著名な人々や有爵の名士も含まれていた。委員長としてホームズ、議長としてメルヴィル主任勅任視学官（Beresford.V.Melville,1857-1931）、そして、委員としてリーズ大学副学長のマイケル・サドラー（Michael Ernest Sadler,1861-1943）、労働者教育協会（Worker's Educational Association）の事務局長マンスブリッジ（Albert Mansbridge,1876-1952）、



リットン伯爵 (Lord Lytton, 1876-1947)、ホワイトハウス (J.H. Whitehouse)、シレス夫人 (Lady St. Cyres)、マージソン夫人 (Lady I. Margesson, ?-1946)、モンターギュ夫人 (Mrs. G. Montagu、後のサンドウィッチ伯爵夫人) らがいた<sup>24)</sup>。

協会が設立された後、ロンドン、リバプール、シェフィールド、リーズ、ケンブリッジでモンテッソーリ教育に関する講演会が盛んに行われ、多くの聴衆を集めた。またこの時期、ダブリン大学教授カルヴァウエル (Edward P. Culverwell) は『モンテッソーリ・メソッドの原理と実践』 (*The Montessori Principles and Practices*) を出版した。彼は各地で講演活動を積極的に行い、モンテッソーリ教育の普及に努めた。

また、ノーフォークのイースト・ラントン (East Runton) にあるホーカーの自宅にイギリス最初のモンテッソーリ・スクールが開設されている。ノーフォーク学校当局の協力により、イースト・ラントン小学校から12人の子どもたちが選ばれ、リドベッター嬢 (Miss Lydbetter) がその指導に当たった。彼女は、当時モンテッソーリ教師養成コースを出たイギリス唯一の有資格教師であった<sup>25)</sup>。この学校を訪問する教育関係者も増え、イギリス各地にモンテッソーリ・スクールが設立されるようになった。

1912年末、ロンドン州参事会は、幼児学校の教師リリー・ハッチンソン (Lily Hutchinson) をローマに派遣し、1913年1月からの国際教員養成コースに参加させている。ロンドン州参事会の年次会合ではモンテッソーリ教育法が中心議題として取り上げられている。議長は参事会メンバーに対して、モンテッソーリ教育が「教育界全体が熱狂しているテーマ」であると指摘し、教育行政にかかわるものである以上「モンテッソーリ教育法について知るべきことはすべて知らなければならない<sup>26)</sup>」と述べている。

#### (2) 第1回国際モンテッソーリ教員養成コースへのイギリス人の参加 (1913年)

1913年1月、ローマで第1回国際モンテッソーリ教員養成コースが開催された。この養成コースには各国から87名が参加した。後にイギリスのモンテッソーリ運動指導者になるクロード・クレアモント (Claude Claremont) もこのコースに参加している。

春には、4カ月コースを終了し資格を取得した12名の教師が、イギリスに帰国、ハムステッド・ガーデン・サバーブからバーミング郊外にかけての公立私立学校で実験クラスを開いた<sup>27)</sup>。

#### (3) モンテッソーリ会議の開催 (1914年)

1914年、モンテッソーリ協会が核となって全国規模の会議を開催することが決議された。それに先駆けて「教育の新理想 (New Ideals in Education)<sup>28)</sup>」が組織されている。この組織の実質的な主導者はホームズであり、それは、広範囲にわたる教育問題について議論し、新しい教育の創造を支援しようとしたものであった。この組織には、教育行政家、視学官や教師、慈善運動家など幅広い層の人々が属していた。

1914年、280人の参加者がイギリス各地から最初のモンテッソーリ・スクールがつくられたイースト・ラントンに集まり、会議に参加した。ホーカー夫妻の協力により、彼らの経営するモンテッソーリ・スクールの見学が計画された。この会議はモンテッソーリ主義者、アメリカ進歩主義運動の代表者、フレーベル主義者及び保育学校の擁護者を結集したものであった。主な参加者には、モンテッソーリ協会議長メルヴィル卿、ノーマン・マックマン (Norman MacMan)、アデレード幼児教育大学長であり、南オーストラリア幼稚園連合会理事長であるリリアン・リサ (Miss Lillian de Lissa)、アメリカ進歩主義運動の代

表者でリトル・コモンウェルス施設長ホーマー・レーン (Homer Terril Lane, 1876-1925)、フレーベル学院 (Froebel Educational Institute) の会長ウィリアム・マザー卿 (Sir William Mather, 1838-1920)、保育学校 (nursery school) 運動の主導者マーガレット・マクミラン (Margaret McMillan, 1860-1931) らがいた<sup>29)</sup>。

#### (4) モンテッソーリの訪英と国際教員養成コースの開催 (1919年)

第一次世界大戦中も、モンテッソーリ教育法に関する議論は盛んに行われた。大戦が終わり、延期されていたモンテッソーリのイギリス訪問が1919年8月末に実現した。モンテッソーリはイタリア公使館員とモンテッソーリ協会幹部そして多数の教師たちに迎えられてロンドンに到着した。9月に開催されたロンドンにおける国際モンテッソーリ教員養成コースに対して2000人の受講希望者があり、その中から250人が選ばれて受講した。ウエストミンスターで行われたモンテッソーリの公開講演には2700人が参加している。また、養成コースに参加できなかった1500人のために短期コースが開設された<sup>30)</sup>。モンテッソーリは、王立医学会 (Royal Society of Medicine) の会合で講演し、文部大臣 (the president of the Board of Education) を含む公式の晩餐会に出席した。この晩餐会はモンテッソーリのイギリス訪問のクライマックスをなすものである。その後も彼女はオックスフォード学生クラブ (Oxford Union Club) で講演するなど精力的に活動し、各地で熱烈に歓迎された<sup>31)</sup>。

### 3 モンテッソーリ教育法に対する批判

以上、ホームズがイタリアの「子どもの家」を訪問した1911年から、モンテッソーリが初めて訪英し、各地で熱烈に歓迎された1919年にかけてのモンテッソーリ教育法導入の経過をたどってきた。1910年代のイギリスにおけるモンテッソーリ教育法導入の特徴は、教育関係者のみならず一般の人々からも注目され、肯定的な評価を受けたことである。このようなモンテッソーリ教育法の流行に対して、同時代人はどのような反応を示したのだろうか。言うまでもなくすべての人がモンテッソーリ教育法に好意を寄せたわけではない。当初から難色を示す人々も多く、モンテッソーリ教育は多くの批判にさらされた。

モンテッソーリ教育法に対する批判は、1. 教育目標及び教育内容に対する批判、2. 運営方法に対する批判に大別することができる。以下、それぞれについて述べよう。

#### 3.1 教育目標及び教育内容に対する批判

ここではまず、当時のイギリスで幼児教育の専門家としての地位を確立していたフレーベル主義者たちからのモンテッソーリ教育法に対する非難をとりあげる。モンテッソーリ教育法が紹介された当初から、フレーベル主義者たちはモンテッソーリの感覚訓練の一面的な形式主義、子どもの想像力の開発の等閑視を激しく非難した。フレーベル主義者であり、幼児学校運動の推進者の一人でもあったメイソン (Charlotte M. Mason) は、「モンテッソーリの教育は知識を捨ててそれに代わるものとして教具と作業を取り入れている。モンテッソーリの子どもたちは行儀がよく、こざれいで鋭敏であるが、もっと別のより高い感性を犠牲にしている。子どものまわりに妖精がたわむれることもなければ、英雄が彼の精神をふるいたたせることもない。頭の中に神や天使は存在しない<sup>32)</sup>」と主張して、モンテッ



ソーリ教育が芸術的、文学的側面を無視し、子どもの想像力の開発を軽視していることを非難した。また、子どもの自由を尊重する原理は新しいものでもモンテッソーリのオリジナルなものでもないし、その教具のセットが、世界が待ちわびてきた適切な教育のための完全で最終的な方法であるとは考え難いとした。

フレーベル主義者たちはさらに、モンテッソーリがウィルダースピン主義の幼児学校に見られるような準備教授の伝統を復活させたと攻撃した。幼児学校における恩物や作業具の単なる玩具的利用、あるいは機械的利用に反対し、これらを子どもたちの教育のために創造的に利用することを幼児学校の教師たちに求め、そのために努力していたフレーベル主義者にとって、教師の指導性を否認し、彼を観察者の地位にとどめようとするモンテッソーリの考え方は我慢ならないものであった<sup>33)</sup>。

次に、新教育運動に関する理論的研究者であり指導者でもあったグラスゴー大学のボイド (William Boyd, 1870-1962) による批判に言及しよう。モンテッソーリ教育が注目され、その方法による実践が広まり始めた 1914 年にボイドは『感覚教育の系譜—ロックからモンテッソーリへ— (From Locke to Montessori: a critical account of the Montessori point of view)』を刊行し、モンテッソーリ教育に対する批判的考察を明らかにしたのである。

ボイドは、モンテッソーリ教育が当時のイギリスの教育要求に応答するものであるかどうかを慎重に見極めようとした。彼はモンテッソーリ教育の基本概念を「個人 (individuality)」、「自由 (freedom)」、「感覚教育 (The education of the senses)」として把握し、それぞれに慎重な検討を進めている。感覚教育はモンテッソーリ教育法の中心であり、彼女の教具の大部分はこの目的のためにつくられたものであった。そのためボイドは、ロック、コンディヤック、ペレーラ、ルソー、イタル、セガンに至る感覚教育の思想的系譜を整理したうえで、モンテッソーリの原理と方法に考察を加えようとしたのである。

モンテッソーリはこれまでの教育思想家と異なり、明確に個別の感覚器官の使用・訓練を意図し<sup>34)</sup>、教育の体系化・組織化を行った。それは、彼女が感覚の訓練を知的発達の土台と捉え、感覚教育と知的発達が不可分の関係にあると考えたからである。これに対して、ボイドは、教具を使った特別な感覚訓練がすべての子どもに必要なかどうか、また、それが知的発達にとって本当に土台となりうるのか、という根本的な疑問を提出している<sup>35)</sup>。

さらに彼は、モンテッソーリのカリキュラムに描画、ダンス、演劇、音楽、文学などの芸術的表現及び宗教に関する諸科目が欠落していることを指摘している。ボイドによれば、カリキュラムの内容が限定されていることは、感覚主義者モンテッソーリの限界を示すものである。彼は、感覚主義者モンテッソーリによって幼児期におけるより高次の精神生活の萌芽的な始まりが過小評価されているとして、「子どもの家」のカリキュラムの内容が狭すぎることを厳しく批判している<sup>36)</sup>。

以上述べたような批判を受けることによって、後にモンテッソーリ教育法自体に修正・変更がほどこされていくことになる。イタリアで成立したモンテッソーリ教育法が、イギリスで批判されたことによってどのような変容を遂げていくのかについては、稿を改めて論じることにはしたい。

### 3.2 運営方法に対する批判

次に、モンテッソーリ教育法の運営方法に対する批判に言及しよう。

モンテッソーリ教育法の批判者たちは、彼女の方法はセガン以来存在していたもので、彼女はセガンの生理学的方法を現代の知識に照らして、障害児のために再構成したに過ぎないと述べた。彼らはまた、感覚訓練の方法は、以前から発達遅滞児の養護学校で使われていたが、そのような学校の献身的な教師たちはその方法に自分たちの名前を冠しようなどと考えもしなかったと指摘した<sup>37)</sup>。

これらの批判の中には、感情的反発も含まれていたが、独占性の問題という検討しなければならない問題点の指摘も含まれていた。独占性の問題とは、教具の著作権や教員免許状の正式認可権など、すべての権限をモンテッソーリ自身が持つことによって、モンテッソーリの名前がいわば商標名となり、彼女の認可なしでは使えない体制が取られたことである。教具は、すでに1913年ロンドンのフィリップ・ティシイ商会が製造販売の独占権を持ち、国内での販売を一手に引き受けていた<sup>38)</sup>。

モンテッソーリ自身が教具や著作の印税、教員養成コースの授業料などによって、この教育運動のみならず自らの生活をも支えなければならなかったために、教具の著作権や教員免許状の正式認可権をモンテッソーリ自身が持つことになったのである。こうした状況に対して、ボイドは、モンテッソーリの「教育方法を特許化するといったかなりさもない商業主義や、教具の使用法に修正も改良も全く認めないといった、教師の知性を軽視した姿勢<sup>39)</sup>」を痛烈に批判している。

こうしたモンテッソーリ教育の商業的側面によってトラブルが起きたことはよく指摘されるところである。また、モンテッソーリが教師たちに教員養成の資格を与えようとしなかったことに対する不満を一つの契機として、後に、モンテッソーリ協会に内部分裂が生じることになる。これらの点に関しては、稿を改めて論じることにした。

## 4 考察

前項で述べたような批判にさらされたにもかかわらず、モンテッソーリ教育法はイギリスに広まっていった。1910年代のイギリスにはモンテッソーリ教育法を必要とする社会的背景が存在し、そのためにモンテッソーリ教育法が肯定的な評価を受けたのだと考えられる。以下、当時のイギリスの状況とモンテッソーリ教育法に内在する諸要素について検討しよう。

### 4.1 社会的背景

ここではまず、モンテッソーリブームという社会現象の発生原因について検討する。

第一の原因として挙げられなければならないのは、モンテッソーリ教育法の新しさを採り入れ、施行する必要性がイギリス社会に発生していたということである。19世紀末から20世紀初頭にかけて、イギリス社会は、産業革命による教育ある労働者の要請と、ナショナリズムの勃興による国民教育の必要性の高まりという新しい課題に直面していた。イギリスでは他のヨーロッパ諸国と比べて公教育の整備が遅く始められた。すでに述べたように1870年の初等教育令によって近代的な公教育制度が設置され、教育を受ける対象者が

低年齢化するとともに、経済的にも学力的にも恵まれた一部の中等教育機関に学ぶ子どもだけではなく、その枠外の庶民層の子どもも公教育の対象となった。しかし、中央教育行政機関としての教育院の設置は1899年になってからのことである。中央教育行政機構の整備が極めて遅く、教育行政に地方分権的な性格が強いこと、私学の比重が大きいことが、この国の教育の特徴であった。

すでに明らかにしたように、教育院や地方教育当局が当初から積極的な関心を示していたことが、イギリスにおけるモンテッソーリ教育法導入の一つの特徴である。それは教育院や地方当局が当時苦慮していた大衆教育の枠組を形成する上で、モンテッソーリ教育法が手がかりを提供するものだったからであろう。

教育院がモンテッソーリ教育視察のために勅任視学官ホームズをローマに派遣し、彼による報告書を1912年に公刊したことは前述した。報告書の序文には、この見解はホームズ個人によるものであると明記されているが、このようにモンテッソーリ教育を高く評価した内容の報告書を公刊したという事実の中に教育院のモンテッソーリ教育に対する共鳴の一端をうかがうことができる<sup>40)</sup>。1919年のモンテッソーリ教員養成コース開催に際しても、教育院は、20人分の奨学金を用意して各地の教員養成大学からこの4か月のコースに参加しやすいようにしている。イングランドやスコットランド各地の教育当局は、コース受講者に対して、その期間を有給休暇とするように配慮した。ロンドン州議会も多数の教師に講義と実習に必要なだけの休みを有給で認めた<sup>41)</sup>。このような公的援助がコース受講者に与えられたということは、モンテッソーリ教育に対する関心が高かったことと、それに対する期待が大きかったことを示している。

教育当局だけでなく、新教育運動家たちがモンテッソーリ教育法に刺激され活発な議論が盛んに行われたことについてはすでに述べた。ボイドが指摘しているように、モンテッソーリ教育法への特別な関心は、それが「多くの人々が伝統的な学校教育の方法に不満を持ち、民衆の教育 (popular education) を現在よりもっと効果的なものとする何らかの改革を熱望している時期に、人々の前に提示された<sup>42)</sup>」ことによったのである。

以上、モンテッソーリ教育法の新しさを採り入れ、施行する必要性がイギリス社会に発生していたということについて述べた。次に明らかにされなければならないのは、モンテッソーリ教育法に内在するどのような要素がイギリス社会にアピールしたのかということである。本稿では、以下の五つの要素を取り上げよう<sup>43)</sup>。

第一の要素は、それが乳幼児にとって特別に考案された方法であったことである。モンテッソーリ教育法は、これまで公教育の枠外にいた幼児に注目せざるをえなかったイギリス社会に理論的、実践的基盤を提供した。

第二の要素は、モンテッソーリ教具が個別教授を可能にしたことである。モンテッソーリ教育法は、クラス全体の子どもに「チョークとトーク」という方法で同時に対する従来の一斉教授の形態から脱皮して、個々の子どもの発達を促す個別教授を可能にする新しい方法として注目された。

第三の要素は、それが子どもの自由と自己活動を尊重するという理念を掲げていたことである。モンテッソーリの実践は、旧教育を批判し子どもの自由と自己活動を重視する新教育を推進しようとする人々の精神的支えとなった。画一的で暗記中心の訓練形態の公立学校を改革しようとする新教育運動家たちは、モンテッソーリの実践に学び、自由を許容



する中で子どもの自主性を育てていこうとした。彼女が掲げる子どもの自由と自己活動の尊重という理念は、新教育運動の目的概念や方法概念として強力な支持を得ていったのである。

第四の要素は、それが科学的アプローチに基づく新しい方法であったことである。医者  
のモンテッソーリには、障害児研究から導かれた医学的生理学的な知見があった。19世  
紀末のロマン主義的な教育学ではなく、科学的根拠に基づいた彼女の教育方法は多くの  
人々の信頼を得ることができた。

第五の要素は、それが幼児に読み書きをより早く、より簡単に、より幸せに教えること  
を約束するものであったことである。モンテッソーリ教育法をイギリスに公式に導入する  
ことに尽力したホームズが、教育院への報告書の中で3R's教授におけるモンテッソーリ  
の成功を賞賛したことについては前述した。モンテッソーリ教育法を批判的に検討したボ  
イドも、3R's教授における彼女の成功を高く評価し、次のように述べている。「この新し  
い型の学校（筆者注 モンテッソーリ・スクールを指す）—そこでは、子どもたちは強制  
されなくても喜んで学び、普通なら長い苦痛と努力の末にやっと得られる読み書きの力を  
わずか数か月で身に着けてしまう—で達成されたと報告されている驚くべき成果は、当然、  
注目される価値を持っている<sup>44)</sup>」と。モンテッソーリブームの背景には、3R's教授や公  
開入学試験などを重視する中産階級による大歓迎という事情もあったのである。

以上述べたようなモンテッソーリ教育法に内在する諸要素と、1910年代イギリスの社  
会状況がいわば共鳴して、モンテッソーリブームという社会現象が発生したと考えられる。

#### 4.2 モンテッソーリ教育支持者の姿勢

最後に、ブームが過ぎ去った後も、イギリスの幼児教育界にモンテッソーリ教育の原理  
が定着していくことに貢献したモンテッソーリ支持者の姿勢に言及したい。

モンテッソーリ教育支持者の中には、極端な心酔者、崇拜者が存在した。彼らの多くは  
直接モンテッソーリとの接触を経験した者、あるいは教員養成コースを出た者であった。  
しかし言うまでもなく、盲目的な崇拜や心酔は教育運動を停滞させ妨害するものである。  
モンテッソーリ教育支持者の大部分が当初から、イタリアで成立したモンテッソーリ教育  
法を直輸入しようとするのではなく、それをイギリスの状況に合わせて柔軟に修正してい  
こうとする姿勢を持っていたことが、後に、イギリスの幼児教育界にモンテッソーリ教育  
の原理と教具の一部が定着していくことを可能にしたと考えられる。

モンテッソーリ教育法の普及に努めたモンテッソーリ協会が冷静かつ客観的にモンテッ  
ソーリ教育法に対応していたことを示す三つの事例を以下に示そう。

第一の事例として、1913年1月のT.E.S.紙上に掲載された、モンテッソーリ教育法は  
未完成なものであり、流動的なものであって固定的なものではない、というモンテッソー  
リ協会の見解をあげることができる。モンテッソーリ協会によると、教師は教具の使用に  
隷属する必要はないし、子どもの活動の流れを豊かにするために付加したり考案したりす  
ることは自由である。子どもの自由という原理（the principle of freedom for the child）さえ  
把握していれば後はそれに続くであろう。以上述べたように、モンテッソーリ協会は、教  
具の使用法よりも、子どもの自由という原理を把握していることが何より肝要であるとい  
う立場を取っていた<sup>45)</sup>。

第二の事例として、同年3月にT.E.S.紙上に掲載された次の記事を挙げることができる。それによると、いくつかの教育当局がモンテッソーリ教具を注文し、幼児学校で教具を使用させようとしている噂があるが、教育当局はその決定を考え直したほうがよいとモンテッソーリ協会は考えている。なぜなら、モンテッソーリ教育の原理に基づいて再組織化されていない学校に教具を導入しても無意味だからである。タイムズ紙のある記者が、モンテッソーリ協会はどんな犠牲を払ってもイギリスにモンテッソーリ教育法を導入しようとしていると報じているが、それほど真実から遠いものはない。なぜなら、モンテッソーリ協会はモンテッソーリ教育法を明確にし、その定着を促進することを目指してはいるが、必要ならば、その定着を遅らせてもよいと考えているからである<sup>46)</sup>。

最後に第三の事例として、ロンドン研究サークルのメンバーであるベアード嬢(Miss Baird)による研究発表を取りあげよう。発表のテーマは「イギリスの子どもにモンテッソーリ文字を使用して」(The Use of the Montessori Letters with English Children)であり、内容は以下のようなものであった<sup>47)</sup>。

英語の綴りと発音は難しいので、読み書きの教育を完全にモンテッソーリ教育法だけで行うのは不可能である。書くことに関して言えば、イタリアの子どもはサンド・レターを何日間もくり返し反復して触っているが、イギリスの子どもは数度触れるとチョークで書きたがる。そのため、イギリスの子どもはイタリアの子どもほど正確に綴りを憶えず、作文指導が難しい。読むことに関しては、イタリア語の表記文字と英語とに違いがあり、適用は難しい。結局、モンテッソーリ教育法は書くこと、特に単語と発音をつなぐ方法を工夫すれば役に立つが、読むことに関してはあまり期待できない。

イタリア語の綴りは、ほぼ完全に音声と対応しているが、英語は、そうではない。また、イタリアの子どもとイギリスの子どもでは教具に対する反応が異なる。したがって、モンテッソーリ教育法は英語の読み書きの教育に役に立たないというこの実践報告は、イギリスの国情に合わせてモンテッソーリ教育法を冷静に検討したものとして注目すべき報告であろう。

以上述べたように、モンテッソーリ教育法を盲目的に受容するのではなく、イギリスの実情に合わせてそれを柔軟に修正していこうとする姿勢がモンテッソーリ支持者の主流を占めていたことが、ブームが過ぎ去った後も、イギリスの幼児教育界にモンテッソーリ教育の原理と教具の一部が定着するにいたった原因の一つであると推測できる。

## おわりに

以上、1910年代のイギリスにおいてモンテッソーリ教育法がどのように受け入れられていったかについて見てきた。

まず、モンテッソーリ教育法が導入された1910年代のイギリスの教育状況にモンテッソーリ教育法受容の素地があったことに言及した。次に、1910年代のイギリスにおけるモンテッソーリ教育法導入の経緯を辿り、モンテッソーリ教育法に対する批判について明らかにした。

さらに、当時のイギリス社会にモンテッソーリ教育法の新しさを採り入れ、施行する必要性が存在していたことに言及し、その状況とモンテッソーリ教育に内在する諸要素がい

わば共鳴してモンテッソーリ教育法の大流行という社会現象が発生したことについて述べた。諸要素とは、それが乳幼児にとって特別に考案された方法であったこと、教具が個別教授を可能にしたこと、子どもの自由と自己活動を尊重するという理念を掲げていたこと、科学的根拠に基づいた方法であったこと、それが幼児に読み書きをより早く、より幸せに教えることを約束するものであったことである。これらはいずれも当時のイギリス社会の要求に応答するものであった。以上のことから、1910年代のイギリスにモンテッソーリ教育法を必要とする社会的背景が存在し、そのためにモンテッソーリ教育法が肯定的な評価を受けたということが明らかになった。

最後に、海外の教育方法を盲目的に受容するのではなく、自国の教育風土に合うようにそれを修正し変革していこうとしたモンテッソーリ支持者の姿勢に言及した。そのような姿勢が主流を占めていたことが、ブームが過ぎ去った後も、イギリスの幼児教育界にモンテッソーリ教育法が定着していくことに貢献したと考えられる。

本稿では、モンテッソーリ教育法が受け入れられた1910年代のイギリスの社会状況について論じてきたが、新教育運動とモンテッソーリ教育法との関連、想像力論争と独占性の問題については多くを論じることができなかった。これらの問題に関する検討を今後の課題としたい。また、イギリスで批判されたことによって、モンテッソーリ教育法自体に修正・変更がほどこされていくことになる。イタリアで成立したモンテッソーリ教育法が、批判されることによってどのような変容を遂げていくのかについては、稿を改めて論じることにはしたい。

## 註

- 1) Kai Kimiko, The modification and adaptation of Montessori education in Japan, *International Journal of Learning*, 2009 16(7), p.674
- 2) Sol Cohen, The Montessori Movement in England, 1911-1952, *History of education*, 1974, vol.3, No.1, 51-67
- 3) Rita Kramer, *Maria Montessori : A Biography*, New York, Putnam's Sons, 1976. 三谷嘉明他訳『マリア・モンテッソーリ—子どもへの愛』新曜社 1981
- 4) 林信二郎「イギリスのモンテッソーリ運動」岩崎次男編著『近代幼児教育史』明治図書 1979
- 5) T.E.S. は、1910年9月に第1号が出、月1回の刊行でタイムズ紙上の教育関係の記事、論文をまとめて掲載したものである。1916年9月からは毎木曜発刊の週刊となる。
- 6) 林信二郎「イギリスにおけるモンテッソーリ運動に関する一研究—1910年代を中心として—」埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）第26巻 1977 pp.17-29
- 7) 林信二郎「イギリスにおけるモンテッソーリ運動に関する研究—1920・30年代を中心として—」埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）第29巻 1980 pp.51-61
- 8) 三笠乙彦「ナンの時代とその教育学」『自己表現の教育学』明治図書 1985 pp.66-75
- 9) 山崎洋子『ニール「新教育」思想の研究』大空社 1998
- 10) 出来高払い制度に関しては、R. オルドリッチ 松塚俊三/安原義仁監訳『イギリスの教育—歴史との対話』玉川大学出版部 2001に詳しい。
- 11) 山崎洋子「イギリス新教育における『自由』の宗教的性格」鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）第19巻 2004、p.122
- 12) この時期の幼児学校の状況に関して、主に、田口仁久『イギリス幼児教育史』明治図書 1976、N・ワイトブレッド著 田口仁久訳『イギリス幼児教育の史的展開』酒井書店 1992、世界教育史研究会編『世



- 界教育史体系 22 幼児教育史Ⅱ』講談社 1975 を参照した。
- 13) 婦人視学の報告書によると、5歳未満児の多くが年長の児童と一緒に扱われ、採光や換気の悪い教室で長時間授業を受けさせられ、その間、無言と不動を要求されていたという。楠端希子「イギリスにおける保育者論の展開」日本の教育史学 教育史学会紀要 第42集 1999 pp.151-152
  - 14) 初期の「子どもの家」で行われた読み書きの教育に関してはオムリ慶子『イタリア幼児教育メソッドの変遷に関する研究』風間書房 2007 を参照。
  - 15) Sol Cohen, op. cit., p.52
  - 16) Maria Montessori, *The Montessori Method*, New York, Schocken Books, 1965(1912), p.371
  - 17) 原本は Office of Special inquiries and Reports, The Montessori System of Education, Educational Pamphlets No.24 1912 手を尽くしたが原本を入手できなかった。
  - 18) T.E.S. December 3 1912 p. 143 Froebel: Masoni Montessori The self-Educative Principles
  - 19) 邦訳としては、市来市二『束縛の教育より解放の教育へ』東京育英書院 大正 12 年がある。
  - 20) W・ボイド、W・ローソン共著 国際新教育協会訳『世界新教育史』玉川大学出版 p 122 また、ホームズの教育思想に関しては、山崎洋子「E・ホームズの『教育の新理想』としての『自己実現概念』」『教育哲学研究』第81号 教育哲学会 2000 に詳しい。
  - 21) T.E.S. November 5 1912 p. 127. The Montessori System Mr. Homes' s Official Report
  - 22) 原本は Office of Special inquiries and Reports, The Montessori System of Education, Educational Pamphlets No.24 1912 である。手を尽くしたが入手できず、以下の論文を参照した。Sol Cohen, op. cit., pp.54-55
  - 23) T.E.S. March 4 1913 p. 41. The Montessori Society Mr. Homes' s Paper. なお、今後3年間毎年500ポンドを寄付するという協会の申し出の背景には、モンテッソーリがこの教育の普及に専念するために医学・教育学研究所の講師の職と開業医を辞め、自分とその家族の生活を講演、講習会、教員養成コースからの収入によるようになっていたという事情があった。
  - 24) T.E.S. November 5 1912 p. 127. The Montessori System Mr. Homes' s Official Report
  - 25) Ibid.
  - 26) Rita Kramer, op. cit., p.239 邦訳 p.332
  - 27) Ibid.
  - 28) 翌年より「教育の理想年次会議」と称され、26年間にわたって開催された。より詳しくは、山崎洋子「イギリス新教育における『教育の新理想』運動に関する研究(1)」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第16巻 2000 を参照。
  - 29) Montessori Society, *Report of the Montessori Conference at East Runton*, Women's Printing Society .Ltd., Brick Street. Piccadilly. 1914
  - 30) Rita Kramer, op. cit., p p.254-258. 邦訳 pp.353-358
  - 31) Ibid., pp.264-265. 邦訳 pp.367-368
  - 32) Ibid., p.238. 邦訳 pp.329-330
  - 33) 世界教育史研究会編、前掲書、p.51
  - 34) ルソーは感覚教育を重視したが、個別の感覚器官を訓練しようとはしなかった。また、フレーベルの遊具も個別の感覚訓練を目的としておらず、それで遊ばせながら認識し、感受し、作業する調和的な能力を育てようとした。
  - 35) William Boyd, *From Locke To Montessori*, George G. Harrap & Company London 1914 pp.228-244. 邦訳『感覚教育の系譜—ロックからモンテッソーリへ—』日本文化科学社 1979 pp.172-184
  - 36) Ibid ., pp.245-254. 邦訳 pp.185-192. なお、この点に関してはすでにホームズが『モンテッソーリ教育報告書』(1912)の中で指摘している。

- 37) T.E.S. January7 1913 p.12. Views of the Montessori Society
- 38) Rita Kramer, op. cit., p.240. 邦訳 p.333
- 39) William Boyd, op. cit.,p.10. 邦訳 p.6
- 40) T.E.S. November 5 1912 p. 127.The Montessori System Mr. Homes' s Official Report
- 41) T.E.S. September 4 1919 p.453.Dr. Montessori in London opening of the Traing Course
- 42) William Boyd, op. cit.,p.8. 邦訳 p.1-2
- 43) この考察に関しては、主に以下の文献を参考にした。R.J.W.Selleck, *English Primary Education and the Progressives.1914-1939* ,Rohtledge,2007,pp.28-62  
Jewell .Lochhead, *The Education of Young Children in England*, Teacher's College,1932,pp.15-41  
T.Raymont, *A History of the Education of Young Children*, Longmans,1937, pp.306-325
- 44) William Boyd, op. cit.,p.8. 邦訳 p.2
- 45) T.E.S. January7 1913 p.12. Views of the Montessori Society
- 46) T.E.S. March4 1913 p.41. The Montessori Society
- 47) T.E.S.January5 1915 p.8. Montessori Movement Teaching of English Children

## The Montessori Movement in England,1911-1919

Hisami Nakata

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

This paper examines the features of the Montessori Movement in England from 1911 to1919. Having succeeded in education for handicapped children, Maria Montessori tried to contribute to non-handicapped children education in New School, using her teaching aids.

The work of Montessori gradually spread over the world, and she had a tremendous impact on attitudes toward education in Western Europe ,especially England .

In 1912 a Montessori Society was organized in London. Soon there were Montessori Societies in many other large English cities ; Montessori schools proliferated. For more a decade, the Montessori method was the vital issue in English education.

The Montessori boom played an important role for the modification in English early childhood education.